

STAGE 6 説明的文章(自然科学)

解答(P 51～57)

- ③ (ア) 2 (イ) 4 (ウ) 1 (エ) 1 (オ)(例) 道德を技術で置き換えるのは社会を荒廃させてしまう危険があるので、人間の道德心を涵養し、判断力のある人間であり続けることが必要だろう。(66字) (カ) 3

解説

- ③ (ア) 空欄Aでは、空欄の後で、前の部分を否定する内容が続いているので、逆接の接続詞が入る。また、空欄Bでは、類似した内容の別の具体例を続けて述べているので、並立の接続詞が入るとわかる。
- (イ) 「肩代わり」とは「負担を一方から他方にうつすこと」という意味。つまり道德の役割を技術が代わりにに行っていることを表している。
- (ウ) 空欄2の直後にある「薄れさせてしまった」を手がかりにすると、本来なら、使い捨てはよくないことだという道德心が働くことから、「後ろめたさ」(引け目を感じる)ことが適切である。
- (エ) 傍線部と同じ段落の冒頭の文の内容を指す。つまり、「地球に優しいと自ら感じたことを自発的に実行し、生活まで変えていくとする」発想のこと。
- (オ) 傍線部の直後の段落に、筆者の主張がまとめられているので、根拠の部分と、そうならないためにどうするかを、制限字数内でまとめる。
- (カ) 3の「人間の道德心はだんだんと養われていき、いい社会に変わりそう」の部分があてはまらない。

STAGE 7 論述の資料読み取り問題

解答(P 58～65)

- ⑤ (ア)(例) 一方で、日本の高校生は、すべての項目で半数以下の割合にとどまっています。(36字)
- (イ)(例) 中学生の中には、自分に対して抱く理想と現実との差異に直面して悩む人も多いが、現在の自分の生き方や現在の自分の存在そのものを、もう少し尊重する意識を持つことが大切だということです。(89字)

解説

- ⑤ (ア) 表から、「自分は優秀だと思う」、「自分は価値のある人間だと思う」、「自分にはできることがたくさんある」というすべての項目において、日本の高校生の割合が「半数」以下であることを読み取ってまとめる。
- (イ) Bさんの発表のまとめである「自分に対して抱く理想と現実との差異に直面して、悩んでいる中学生が多いのではないかと考えました」という部分と、Cさんの発表のまとめである「現在の自分の生き方や現在の自分の存在そのものを、もう少し尊重する意識を持つことが大切ではないかと思いました」という内容とを、うまくつなぎ合わせて書く。

③ (ア) 2 (イ) 3 (ウ) 1 (エ) 4 (オ) 2 (カ) 3

解説

③ 第一段落で、女の子が鷺に連れ去られて、父母が必死に追いかけていることが書かれているので、ここでは子どもを取り戻すことをあきらめたのである。

(イ) 「奪はれじ」というのは、「奪われまい」という意味である。つるべを奪われないように争っているのである。

(ウ) 「この女の子を罵りてはいく」とあるので、その郷の女の子たちが言ったとわかる。したがって、「己」(あなた)は、宿の家の女の子のことだとわかる。

(エ) 「それゆゑ」の「ゆゑ」は「故」と書き、「理由・わけ」のこと。ここでは、女の子が泣いている理由である。「……罵りて打つ。家の女子打たれて、泣きて家に帰る」とある。ののしられて、ぶたれたのが泣いている理由である。

(オ) 「何の故に」は「なぜ」という意味で、疑問を表す。したがって、「なぜ……言うか」という疑問を表していることをつかむ。

(カ) 「それ」は、郷の女の童部が聞き伝えた内容である。聞き伝えたのは、家主が女の子を見つけて育てるようになったいきさつである。

(キ) 「あさまし」は、良いことにも悪いことにも、「驚きあきれるばかりである」「意外だ」という意味で使われる。また、「嘆かわしい」「興ざめだ」や「とるに足りない」「みすばらしい」の意味もある。現代語では、「心が卑劣だ」「さもししい」の意味で使われる。古語でも、あまり多くはないが、この意味で使われることもある。

家のあるじが、女の子に「どうして泣くのだ」と聞いたところ、女の子は泣くばかりで、その理由を答えない。その時、但馬の泊まり客が見ていたことなので、あったことの様子をくわしく語って、また言うには、「そもそも、この女の子を、どうして鷺の食い残しなどと言うのですか」と聞くと、家のあるじが答えて言うには、「ある年のある月のある日、私が鳩の巢にものを落してしまった時、幼い子どもの泣く声がしたので、その声を聞いて、巢に近寄って見ましたところ、生まれたばかりの子がいて泣いていたのを取り下ろして、それを育てた女の子なので里の女の子たちもそれを伝え聞いて、ののしりたてたのでございましょう」と言うのを、この但馬の泊まり客は、これを聞いて、「自分こそ昔、子を鷺に取られて」と思い出して、思いめぐらすと、「ある年のある月のある日」と言ったのを聞くと、それは但馬の国で鷺に(子を)取られた年月にぴたりと当たるので、わが子ではないかと思ひ出して言うことには、「それでは、その子の親という者はわかっているのですか」と聞くと、家のあるじは「その後、まったく(親のことは)わかりません」と答えたので、泊まり客は「その事でございます。このようにおっしゃる時に思い出したのです」と言つて、鷺に子を取られた事を言うと、家のあるじは意外なことに驚きあきれて、女の子を(泊り客と)見比べてみると、この女の子は、この泊り客に姿形がまったくちがうところがないほど似ていた。家のあるじはそれならば本当なのだあと信じて、同情すること限らない。泊まり客もそういう因縁でここに來た事を言い続けて、泣くこと限らない。

家のあるじはこのように因縁が深く、行き合った事を悲しんだが、(女の子を渡すことを)惜しむことなく許した。「ただし、私もまた何年も養育てたので、実の親とかわりません。そうであるから、共に親として育てましょう」と約束して、その後は、女の子は但馬にも通つて共に親として暮らしたのだった。

(ク) 文章の最後に、「その後は、女子、但馬にも通ひて共に親にてなむありける」とあるので、女の子が但馬と丹後の国とを行き來して二人の親に育てられたことがわかる。2は「一度だけ但馬の家にも行った」が誤り。3は「別人だとわかり」という内容は書かれていない。4は「里の子どもたちと仲良くなった」ということは書かれていない。

【口語訳】

今となつてはもう昔のことだが、但馬の国(現在の兵庫県北部)の七美郡、川山の里に住む者がいた。その家に一人の生まれたばかりの子がいて、庭を這つていたが、その時に、鷺が空を飛んで渡つていて、この生まれたばかりの子が庭で這っているのを見て、飛び下りてきて、生まれたばかりの子をつかみ取つて空に昇つて遙か東に向かつて飛んでいってしまった。父母はこれを見て、泣き悲しんで追いかけて取り戻そうとするが、遙か(高いところに)昇ってしまったので、どうすることもできず追うことをあきらめた。

その後十年あまりが経つて、この鷺に取られた子の父が、用があつて、丹後の国(現在の京都府北部)の加佐の郡に行った。その里に住む人の家に寄つた。その家に幼い女の子がいた。年は十二、三歳ほどである。その女の子が大通りにある井戸に行つて水を汲もうとすると、(ちょうど)泊まつている但馬の国の者も、足を洗うためにその井戸に行つた。そうすると、その里の幼い女の子たちがたくさんその井戸に集まつて水を汲んでいて、この(男が)泊まつている家から來た女の子の持つているつるべを、その里の女の子が奪つた。(男が泊まつている)家の女の子はこれを惜しく思つて、奪われまいと争つていたところ、里の女の子たちは皆ぐるになつて、この家の女の子をののしつて言うには、「おまえは鷺の食い残しだぞ」と言つて、ののしつてたたく。家の女の子はたたかれて泣いて家に帰る。この泊まつている男も帰つた。